

NEA 勤務を終えて

日本原子力研究開発機構

須山 賢也

suyama.kenya@jaca.go.jp

1. はじめに

3年に涉った NEA データバンクでの勤務が 3月 31日に正式に終了した。帰国後も 14日間の自主隔離が要請されるために、使っていない年休と一時帰国を組み合わせることで 3月は全休とし、2月末に 1年半ぶりとなる祖国の土を踏んだ。この原稿を書き出した 3月上旬は成田空港近くのホテルの中。任期最終年は新型コロナウイルスの影響でアパートに一人籠もりっきりの生活を続けていてそれに終止符を打つこととなったが、家族に会うのは少しお預けとなった。籠もりつきり生活は 2020年 3月 12日から始まったので、結局丸々一年を一人で過ごした事になる。狭いホテルでの一人の生活はつまらないけども、昔のことを思い出すには良いチャンスだ。と、パリで考えていた事をまとめることにした。

2. 巣籠り生活

去年は日本の人と話しをすると「パリは外出禁止令が出ていて大変ですね」と聞かれたものだったが、フランスには日本のような空気を読んだ行動が求められると言うか妙な同調圧力や互いを監視する雰囲気は無いし、外出禁止と言っても全く外に出られないわけではないので、思ったほどの閉塞感は無かった。と言うのも外出してよい理由に運動とか犬の散歩も含まれており、4月の頭ぐらいまでは印刷あるいは手書きした紙のフォームにペンでサインをしないといけないのでちょっと面倒だったが、そう時間を置かずにスマホの画面上で許可証を作成してそれを保存しておけば良いことになったからだ。そして暫くは自宅から半径 1km 以内という制限が付けられていたものの、そんな厳密なことはフランスでは大抵の場合誰も考えないので私は気楽に外出していた。一度だけジョギング中に自宅から 2km 弱離れたあたりで警官に呼び止められたが、国際機関職

員ということもあって見逃してもらったことがあった。それほど当局も力を入れて取り締まりをしている様子は無かったのだ。

数日おきの食料調達で出かける以外にも、徒歩通勤をしていた代わりにと運動不足解消・健康維持の目的で、毎日ブローニュの森の中を散歩するのが私の日課となった。春先から夏にかけては仕事前、日が短くなった秋から冬にかけては昼食後、40分から1時間ぐらい、長いときは1時間半ぐらい森の中を一人でテクテクと歩いていた。そして時々カメラを持って出れば、気の向いたままにシャッターを押した。住んでいたアパートは古くて設備の不具合が何回かあったけども、いつでも好きなときに散歩して気分転換できる場所の近くにあったのは運が良かった。全仏オープンテニスの会場も近いので、テニス好きの人が出張で NEA に来る事があればうちに滞在してもらって観戦に行ってもらってもいいななんて勝手に思っていたが、結局そんな楽しい事ができなかったのが残念だった。



いつもの散歩コース、ブローニュの森にて（2020年11月撮影）

しかし食料品を買いに行く必要がない、テレビ会議も入っていないなんて言う日には、本当に誰とも一言も話さずに一日が終わる。朝起きてから夜寝るまで、まったく誰とも会わずまた喋らないという事も何度も経験した。元来出不精で一人でも平気って思うことが比較的多い自分でも、最後の一年は特殊すぎたのか、人と直接、出来れば日本語で

話したいよなって感じるが多かった。そして時々仕事で JAEA の人に電話をすると、ついつい余計な事まで喋って時間を取らせたものだった。

そんな感じなので、パリで飛行機に乗り込んだ時も成田に到着した時も「さらばフランス、また会う日まで NEA！」みたいなカッコイイ台詞も感慨も湧き上がってこず、NEA への赴任を終えてと言ってもなにかこう特別な感情じゃなくて、ようやく終わってくれたなっていうヤレヤレ感の方がずっと大きかった。これは 20 年前の離任の時に感じた寂しさとは違う意味での寂しさだった。

20 年前の NEA 勤務時には、新通貨ユーロ導入という一大イベントがあって、街というかフランス全体に将来に対する明るい希望のようなものが満ち満ちていた。これからフランスや社会がドンドン良くなるんだという漠然とした期待というのだろうか。日本はバブル経済の崩壊の影響を引きずっていたもののその存在感はまだまだ大きかったし、NEA の会議などでも日本の原子力業界の元気の良さもあって、会議参加者にも自信が溢れていて、NEA に勤務する自分の自信にも繋がっていた。もちろん日本が NEA を戦略的に使っているかという問いには全く答えきってはいなかったのだが。

それが今回はどうだろうか。EU の牽引役であるはずのフランスでもあれだけ切望した EU というシステムに対する疑念が無いわけではなく、社会全体に閉塞感が漂い、若い大統領が頭を抱える案件ばかりだった。思い出しただけでも大規模な公共交通機関のストライキ、黄色いベスト運動とそれに乗じた社会騒乱のような暴力の連鎖、パリノートルダム大聖堂の火災、パリ近郊での教師惨殺事件、そして極めつけはコロナウイルスの感染爆発。20 年前だって様々な社会現象があったけども、たった三年間でここまで立て続けに悪い事が連続して起きると、お祓いでもしてもらった方がいいんじゃないかとさえ思えてくる。

その上、日本の存在感もパツとしなくなった。例えばシャルル・ド・ゴール空港から高速道路 A1 を使ってパリに向かうとペリフェリック（環状線）に乗る直前から高層ビルが見え出すのだが、かつてそこには日本企業の看板が数多く掲げられていた。それが今では、中国か韓国の企業の看板に置き換わってしまった。OECD の会議室で使われている大きなディスプレイも昔は日本メーカー製で占められていたが今では韓国メーカー製に置き換わった。ショーウィンドーにあるデジタルサイネージのディスプレイもそう。見る影もなく日本メーカーのコンシューマー向け製品のシェアは落ちたように見える。NEA で同僚だった友人と再会したときに私が使っている日本の S 社製スマホを見せたらもの凄くびっくりされたぐらいだった。NEA でも同様に日本の影は薄い。10 年前の 1F 事故の影響がある事は間違いないが、ある特定分野の技術はトップレベルなのかもしれないけども今流行の SMR の議論などに日本が積極的に絡んでくることもなく、日本はすっかり冴えない国になってしまった。そして NEA 自身が予算危機に直面しており、私の仕事も否応なしにその対応に関係するものとなっていたことも、嘆きやため息の原

困となっていたのだった。

それにしても国際機関の課長という役割は孤独だった。NEA の他の課には課長代理級のスタッフがいて相談しながら仕事をしている様子も見えて羨ましかったが、データバンクにはそれに該当するスタッフがおらず、全てを見様見真似、手探りで業務を開始せざるを得なかった。自分で方針を決めて自分でそれを処理していくので自由に出来るとも言えるが、相談できる相手が基本的にいない作業だったように思う。また普段の業務ではスタッフには出来るだけデータバンク参加国向けのサービスの向上のために働いて欲しいと考え、事務的作業（JAEA では雑用と言われたりするモノ）はスタッフに丸投げせず自分で準備をして案を作り、彼等に私からの提案を投げて意見を聞くようにした。NEA でも思ったよりもそういった仕事は上（管理部門）から降りてくるのにはびっくりだった。律儀な日本人の典型だなと自分でも思ったが、依頼者に迷惑をかけないようにと締めきりだけは確実に守ると決めて、計画的に作業をした。それはなんとか最後まで守ることが出来たようだ。こう書いてしまうと、単に大変だったね、苦労したね、で終わってしまうのだが、それでも3年間のNEA勤務は何物にも代えがたい経験だった。全てが旨くいったわけではないが、困難な時でも精一杯相手の事も良く考えて方針やスケジュールを定め、最適と思った方向で物事を進める経験を得た貴重な時間だった。もちろん一人で決めても他のスタッフの力を借りてチームで対処しなければ何も出来ない。そのためにも普段からそれぞれのスタッフの様子や個性を理解しておくこと、スタッフや組織の将来を考え、時間がかかってもスタッフの成長を期待してじっと待つことの大切さやその効果を感じた3年間だった。

生活面では実質的に約20年ぶりに完全な一人暮らしをする事となったのが問題だった。最初の2年はコロナウイルスの問題がなかったので、時々レストランに行き気楽に外食を楽しむことも出来たが、去年1年は朝食、昼食、夕食と3食を1人で大したこともない食事を準備して1人で食べるのはなんとも侘しかったし、単調な食事（レパトリー）に飽き飽きしてしまった。そういう時は、家族のために休まずに料理をしてくれている日本にいる家内の事を思い出し、過去に遡って感謝したものだった。そういう家族の有り難み、日常の大切さを改めて感じる事が出来たのも得がたい経験だった。

と、このように、何かと暗い話題も多かったのだが、色んな経験をさせてもらった3年間だったな、と思う。

3. テレワーク考

仕事の面で言えば、テレワーキングの急速な広まりが印象的だった。NEAのスタッフの場合、以前から支給されるラップトップパソコンにはVPN接続用のシステムがインストールされ、またRSAトークンもあの鍵型のハードウェアあるいはスマホにインストールするアプリケーションで支給されていた。また、内線・外線電話はNEAのネットワー

クに統合されているため、支給されたパソコンから内線電話だけでなく国際電話をかけることも可能で、ネットワークさえあればいつでもどこからでも職場と同じ環境で仕事が出来た。そのため NEA のスタッフはテレワーキングに非常にスムーズに移行した。JAEA と違って IT 管理者が全てのスタッフの IT 環境に責任を持ち、全員が統一されたハードウェアとソフトウェアを使うメリットであった¹。

私は昨年 5 月に私物を引取に一度自分のオフィスに行ったが、あとは離任前の今年 2 月後半に滞在許可証や PC などを担当者に手渡しするため、一度オフィスを訪れただけだった。一年でたった 2 回。あとはずっとアパートからテレワーキングを続けた。それだけテレワーキングは有効かつ効率的に行われていた。散歩しながら良く考えていたのだが、テレワーキングが社会に受け入れられるなら、我々（特に国際機関職員）の働き方や生き方が大きく変わる契機になると思っていた。労務管理という側面からすれば、部下が職場に出て来ているということを物理的に確認出来ないのは気持ちが悪いと思う人もいるだろう。しかし、物理的な管理が必要な「現場」の無い職種に限ってであるが、もし、我々が仕事をしている証拠と実態が今や TCP/IP のルールに従ってネットワーク上を行き交うパケットであるのなら、理論上我々は世界中のどこにいてもいいはずである。国際機関に採用されても現地には行かず東海村の自宅から支給 PC で仕事をしたって、成果が十分ならそれで良いような気がする。

我々の社会は、あとから考えれば「なんであんな事をやっていたんだろう」と思うような事であっても、受け入れている集団が許容すればそこでの常識としてそれを認め、当たり前のようにそれに従っている。コロナウイルスの影響で否応なしにこれまでの常識が崩され、我々がこれまで当たり前と思っていたものは、当たり前でなくなるのではないか。いや、常識の大転換によってのみコロナウイルスとうまくやっていけるのかもしれない。その常識の一つが毎日膨大なエネルギーと時間を使って繰り返してきた出勤なんじゃないかと思っていた。人間社会はこれまで多くの天災、人災でもたらされたカオスを乗り越え、多くの人が納得する新たなお作法を作り出してきたのだろう。ではこのコロナウイルス惨禍後に我々が望み選ぶ新たな常識とは何なのだろうか、その一つがテレワーキングなのであれば、ネットワーク構築に莫大な資本を投下してきた価値はあったのだろう。しかし、それが広く受け入れられるまでにどのくらいの時間がかかるのだろうか、あるいはやはり以前と同じ常識をそのまま維持する事を我々は選択するのだろうか、、、と、森を散歩しながら思っていたのだった。

¹ ただし機器選択においては個々のスタッフにはまったく自由が無く、パソコン入れ替え時のワクワク感は全く無い。このやり方は研究所である JAEA では受け入れられないだろう。



ブローニュの自宅でのテレワーキング中に記念撮影

PC 画面は OECD 事務総長グリア氏

(2020 年 11 月撮影)

4. パリの良さ

仕事の面はこれまで書いたような状況であったのだが、最後の一年はこんな感じで部屋に閉じ込められてしまったので、生活面でもまったくパリの良さを感じることが出来なくなってしまったのが残念だった。レストランも無し、美術館も無し。夜間外出禁止。パリの良さの大部分がスポイルされたようだったが、さらにガッカリさせられたのは、大きなスポーツイベントがことごとくキャンセルされたことだった。パリは欧州の中心都市の一つなので大きなスポーツイベントが頻繁に開催されている。それを見に行くのが一人暮らしの私の楽しみの一つだったのだ。

フルマラソン、ハーフマラソン、ローラースケートの大会等は自宅近くの道路がコースの一部になっていて観戦するのも楽々だったし、アパートが全仏オープンテニスの会場であるローラン・ギャロスまで徒歩3分という立地を活かし、一流選手のプレーを何度も観戦する機会を得た。フランスは柔道大国なのでパリ国際柔道大会は大盛り上がり。陸上競技でも IAAF (当時) 主催の世界トップレベルの選手が集まる大会「ダイヤモンドリーグ」はパリ大会だけではなく近隣諸国で開催されている大会にも休暇をとって観戦に行った。特に去年は8月末に欧州陸上選手権がパリで開催される予定となっていたので、1週間の年休を取って観戦の準備をしていたのだった(結局大会自体がキャンセ

ルとなったが)。

そう言ったスポーツ観戦をするときには、カメラを持ち込んで一流選手のパフォーマンスを楽しみつつその写真も撮影した。もともと写真は好きだったので、スポーツ好きと写真好きが融合するのは時間の問題だった。撮影できたらそれをスマホに入れて時々見ては撮影のシーンを振り返ったり、相手をさせられた人には申し訳なかったが、知り合いに見せては「うまく撮れたでしょう～」と悦に入る困ったおじさんになっていたのだった。こういった写真撮影で問題になるのが、カメラの持ち込み制限である。パリ国際柔道大会が開催されるベルシーアリーナはカメラの持ち込み制限が厳しく、カメラをクロックに預けさせられたが、ダイヤモンドリーグが開催される陸上競技の場合は意外と制限が緩く、大型のズームレンズでも問題無く持ち込めた。全仏オープンテニスはちょっとトリッキーだった。ルールによれば全長 20cm 以上のレンズは持ち込み不可と決まっているのだが、2018 年、2019 年には係員がそういった制限をあまり知らずにゲートを通してくれたり、いかにも鷹揚なフランス的対応で次はダメだよと言ってそっと見逃してくれたり、ある入り口で入場拒否されても他の入り口にしらっと行けばそこではチェックされずに通れたりもした。しかし年々ルール適用が厳格になっているようで、持ち込む機材のサイズを私も気をつけるようにしていた。そして、コロナウイルスの影響で観客数制限が厳しくなる中で奇跡的に唯一有効となったチケットを手に入場した 2020 年には、入り口で責任者なる人物が出て来て、見つけた単焦点レンズを手にしつつ、「このレンズはズームできて長さが伸びるのではないか？」とか、根掘り葉掘り聞かれたのだった。なんとかそこはクリアして入場出来たが、体格の良い警備担当者にフランス語で色々聞かれるのでドキドキものだった。しかし、そういった関門を過ぎればあとは自由に撮影できる。

気が向いた時やこういった大きなイベント前などには、機材の確認とウォーミングアップを兼ねて、これまた自宅近くのロンシャン競馬場の周囲にいる自転車愛好家の写真を撮って練習をしていた。仕事で写真を撮影するプロとは違い私は単なる愛好家なので、そうやって技量を維持することが必須なような気がしていたのだ。そうしていると自転車愛好家に声をかけられ、写真を撮ってくれと依頼されることが何回もあった。SMS や WhatsApp で連絡先を交換して写真を送ってあげると、とても喜んでくれたのが嬉しかった。日本だと初対面の知らない人に声を掛けて連絡先を交換するなんてまずあり得ないが、そういう気遣いは無用だった。こういったお互いの信頼を大切にしているのはパリ(フランス社会)の良さの一つだなど 20 年前も感じていたが、それは変わっていないようだった。



新しくなったローラン・ギャロスのセンターコートにて
(2020年10月撮影)

また、ブローニュの森を散歩していると私と同じように一人で黙々と散歩をする人、犬の散歩をしているグループやジョギングをする人々、ワイワイガヤガヤとペタンクをするおじさん達、ベンチや湖畔に座ってぼーっとしている人等々を頻繁に見かけた。彼等の写真を撮影したことは殆どなかったけども、自転車愛好家と同様に、みなさん与えられた制限の中で出来るだけ自分の時間を楽しんでやろうって考えているようだった。そうやって自分の時間や趣味を追求している人達の存在は、長期化するコロナウイルス騒動にへこたれずに頑張っているフランス社会の健全性を見るようでもあった。

久しぶりに見た日本のTVのワイドショーはとにかく悲観的なことばかりを繰り返しているみたい。いつかまたフランスに出張や旅行で訪れることがあると思うが、今の段階ではそれがいつになるのかは皆目見当も付かないなと思いきらされるとやっぱりガッカリして元気が吸い取られるような感覚すら覚える。でもこうやって向こうで撮影した写真を見直していると、過去3年間の経験や生活を思い出すだけでなく、フランスで見た彼等のような前向きさがあればこのコロナウイルスの問題も乗り越えることが出来るんじゃないかなと思えてくるのだった。

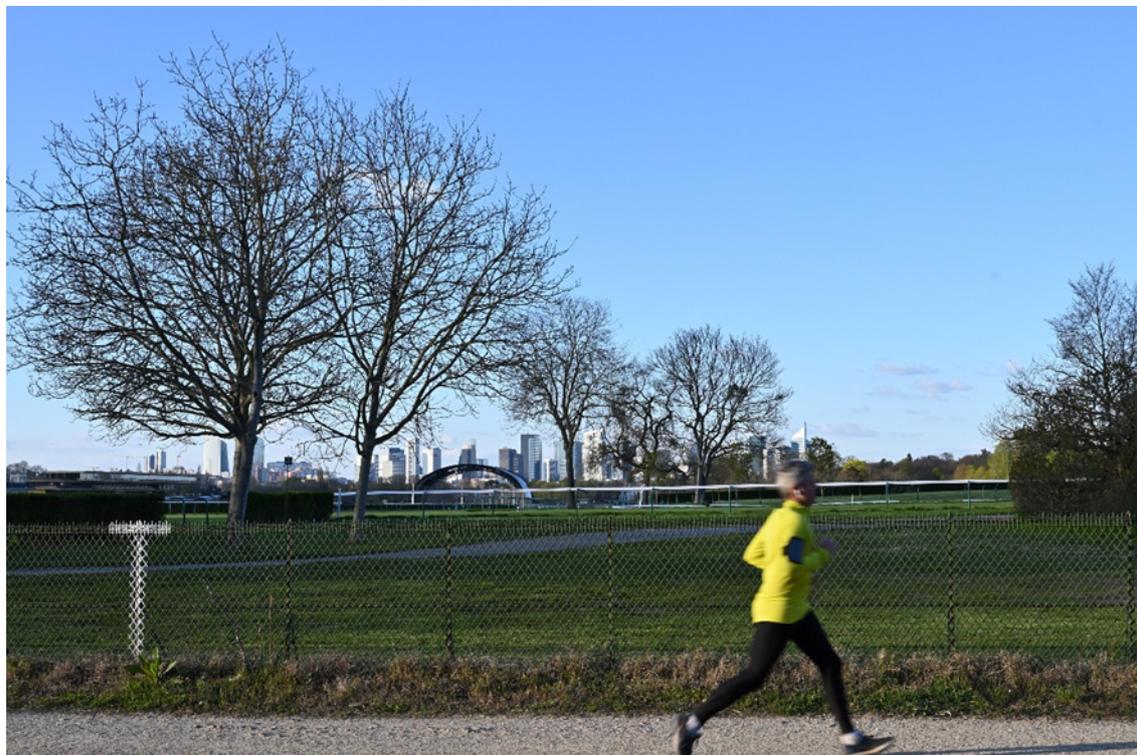


ロンシャン競馬場の外周で練習をする自転車愛好家の皆さん
(2020年7月撮影)

5. 終わりに

NEA 赴任を終えた今感じていることを、まったくとりとめもないけども書いてみた。NEA での業務のことなどは以前から核データニュースに書いてきたし、つい最近日本原子力学会誌にも関連する記事を掲載したので今回はそういったテクニカルな記事は割愛することとした。帰国した今ふと思うことは、パリでの生活の楽しさと苦労もそうだけでも、NEA って本当に日本の役に立っていたのかな、自分はデータバンク参加国にとって価値ある仕事を本当に出来たのかなという事。NEA のような国際機関が本当に必要とされる組織なのかはこういった人と人の交流が制限される状況だからこそ問われていて、予算が無いなら無いなりに新しい仕事の方法や成果の見せ方を NEA 自身が提案していけるかに NEA の価値の有り無しがかかっているんじゃないかと考えてみた。また、自分の仕事の意義は中長期的なデータバンクのサービスに対するデータバンク参加各国の評価によって判断されるのだろうとも思ったりし、その度に頼りない私を支えてくれた古巣に働くスタッフの事を懐かしい気持ちで思い出したりしている。

そして、私自身が新しいチャレンジの時。フレッシュな気持で、4月から新しい職場で新しい業務に取り組んでいきたいなと思っています。



ロンシャン競馬場の外周からラ・デファンス方面を見る
(2020年3月撮影)